
紅の蓮を救い出せ

桃野アリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の蓮を救い出せ

【Nコード】

N8960Y

【作者名】

桃野アリス

【あらすじ】

少年陰陽師現代パラレル物です。

まだまだ稚拙な文章ですが、応援していただけたら幸いです。
????

安倍清明が息を引き取った数十年後、安倍昌浩が黄泉へと旅立つてから時は流れ、平成。

安倍家は裏で陰陽師家業を営んでいた。十二神将は平安時代から変わらず、昌浩の遺言で安倍家に仕え続けていた。だが、十二神将最強にして最凶の煉獄の将、勝蛇は神将とは仲良くなったものの、心

を開く人間は現れなかった。

そんな時、安倍家に春輝と昌輝という双子が生まれる。

2人は、昌浩と同じく、勝蛇を恐れず笑いかけた。

だが、その双子は、誰にも言えない秘密があつて……。

夢（前書き）

始めまして、桃野アリスと申します。

2次創作作品を投稿するのは初めてなのですが、温かく見守って頂けたら幸いです。

夢

十二神将の主であつた安倍清明がこの世を去り、時を経て同じくこの世から去つた安倍昌浩。

黄泉の路へと旅立つ時、共に2人は己を見る家族と人外の者達に微笑んでいたという。

そして、残された十二神将は、昌浩の子孫に代々仕える事になる。

それは、生前の昌浩の意志であつた。

清明と昌浩の他にも、多くの人が十二神将の主となつたが、十二神将勝蛇は心を開かなかつた。

いや、この表現では語弊があるかもしれない。

勝蛇が近寄るだけで、子供どころか大人でさえも恐怖に身を竦ませた。

昌浩と彰子の息子の明昌は怯えず、霊力が強かつた為十二神将の主となつたのだが、明昌に子供が出来ることはなかつた。

勝蛇が最後に心を開いたのは、明昌だつただろう。

そして、数え切れないほどの時が流れ、今は平成である。

???

何も見えない闇の中。

男は一人、そこに佇んでいた。

深い紅色の髪、黄金の瞳。長身で、逞しい体躯。

人間とは比べ物にならない程綺麗な顔立ち。

だが、その顔が笑う事は無い。

何をするでもなく、ただそこに居続ける。

不意に、男は目を見開いた。声が聞こえた気がしたのだ。

——紅蓮！

それは、懐かしい、誰よりも大事な人の声。

——もっくんやーい

だけど、もう居ない人の声。

分かっている。この声が、もう俺の名前を呼ぶことはない。

だって、俺は旅立った瞬間を見ていたのだから。

これは幻聴なのだ。

そう思い耳を塞いでも、呼ぶ声は止まらない。

覚えている。

——— ほか、俺、生きてるんだ

呆けたような声を。

覚えている。

——— お前、俺の目にならない？

——— もっくん、俺の目になってよ……

嬉しそうな声と、泣きそうな声を。

…… 覚えている。

——— 何言ってるんだい。…… ああ、また痛そうな顔してる。馬鹿だなあ。痛いときは、痛いって言っていていいんだよ？

俺を救ってくれた声を。

——— ほかだな。俺がいるって言ったの、独りじゃないって言ったの、お前じゃないか

例えもう居なくなってしまうたとしても、それでも俺は。

見た者に元気を与える笑顔を。

孫言つな、と憤慨していた声を。

一度忘れてしまった記憶だけど。

もう絶対に、忘れない——。

夢（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願い致します。

締め

「勝蛇」

目を開けると、肩に付かない位置で切りそろえた漆黒の髪に黒曜の瞳を持つ女性が覗き込んでいた。

彼女が身体を反らすのと同時に、男は身を起こした。

男は十二神将、勝蛇。驚恐を司る十二神将最強にして最凶の闘将だ。

勝蛇は眉を顰め、女性に声を掛けた。

「……何の用だ、勾」

「用がないと来てはいけないのか？それに、寝ていたのだから良いだろう。寝ている、という事は暇だという事だからな」

「……」

女性は十二神将が一人、勾陳。凶将で、騰蛇の次に通力が高い。

普段は理性で力を抑え込んでいるが、怒るととても怖い。「冗談抜きで。」

「良い知らせだ。子供が生まれたらしい」

薄く微笑して勾陳が言うと、勝蛇は眉を顰めた。

「……そのどこが良い知らせだ。怯えるに決まってるだろう」

「だが、昌浩は怯えなかったな」

間髪入れずに戻って来た答えに、黄金の瞳が微かに揺れた。

「それはそうだが……」

「正直、今のお前を見ているのは苛々する。分かったら早く行け」

「おい、俺は行くなんて一言も……」

「早く行け」

「だから……」

「行け」

尚も言おうとすると、いつもの苦笑とは違う笑顔を向けられた。

勝蛇は内心で溜息を吐く。堂々と吐かないのは、彼女が恐ろしいからではきつとない。

「……どうせ怯えるぞ」

一言呟き、勝蛇は姿を消した。

「今度は大丈夫だと思うがな……」

その言葉を聞く者はなかった。

???

勝蛇は現世の安倍家に降り立った。

平安時代と場所は同じだが、何度も建て返され、土地が異様に広い普通の家となっている。

「……勝蛇、居るのですか？」

『……ああ』

呼ばれた勝蛇は隠形を解き、顕現した。

安倍吉昌。何の因果か、清明の息子——昌浩の父である吉昌と同姓同名だという事位しか記憶に残っていない。

勝蛇が呼ばれる事は全くと言っていい程なかったからだ。

「子供が産まれました。勾陳も先程会いに行っていたようです」

「……そうか」

勾陳も会いに行ったのか、泣かれなかったのだろうか。

そんな事を考えていると、吉昌が言った。

「そうそう、双子なんですよ」

「……双子？」

堅い声で聞き返すと、吉昌が飄々と返す。

「ええ、忘れてたのですがね」

そんな重要な事を忘れるなど言いたい。

地味に清明の血が受け継がれているのだろうか。そういえば、明昌が亡くなった後安倍家を引き継いだのは、最も清明の性格が出ていた成親の息子だったような。

「隣の部屋に居ますよ。六合が見ています」

「……分かった」

さつさと会って、異界に戻ろう。

赤子は、苛烈な神気に怯えて、泣くに決まっているのだから。

締め（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願いいたします。

再会（前書き）

少し短いです。

再会

部屋の扉を開くと、標準よりかなり大きい揺り籠に寄り添っていた男が振り向いた。

十二神将が一人、六合。腰の辺りで一つに括った鳶色の長い髪と、黄褐色の瞳。木将であり、勝蛇や勾陳と同じ四闘将の一人でもある。傍に近づくと、中で赤子が2人仲良く寝ているのがわかった。

「俺が近くに居るのに、寝てるな……」

「……ああ」

こんな事は、昌浩と明昌以来だ。……他は、全員拒絶したから。

恐る恐る手を伸ばすと、右側の赤子の目が開いた。

「あ……」

きつとまた、怖がらせてしまう。

赤子は本能に忠実で、勝蛇の苛烈な神気を恐れる。

そう思い手を戻そうとするが、出来なかった。

——赤子が、小さな手で勝蛇の手を掴んだから。

そして、赤子は笑った。だが、

「……おい、六合。赤子ってこんな笑い方をするのか？」

「……」

その笑顔は、無邪気ではなく、悪戯っ子の様な含みを感じさせる
笑みだった。

「そういえば、名前は何と言った？」

「……右が春輝、左が昌輝だ」

「春輝、ねえ。そういえば、昌輝はずっと寝てるな」

勝蛇の言葉を理解したかのように、やっと昌輝が目を覚ました。

昌輝は周りを見回すと、紅蓮を見て無垢な笑顔を見せた。

今度は赤子らしくてよかった、と無意識に紅蓮が嘆息した。

???

「どうだ？怖がらなかったら？」

吉昌の妻、露菜に双子に母乳を与えと言われ、六合とともに部屋から追い出されると、勾陳が廊下の壁に寄り掛かっていた。

「ああ……、だが昌輝は兎も角、春輝は赤子らしくないぞ」

「……俺もそう思う」

普段無口な六合が珍しく同意したのに軽く瞠目して、勾陳は微笑した。

「そうだな。でも、懐かしくなかったか？」

その言葉に勝蛇と六合は顔を見合わせる。

言われてみれば、確かに、春輝は懐かしく感じた。

そう——あの笑顔は。

「清明の笑顔、だな」

再会（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願い致します。

ある日の日常1（前書き）

今回は長いかもしれません……。

ある日の日常1

春輝と昌輝に出会ったその日から、勝蛇は顕現することが多くな
った。

今も、春輝を勝蛇が抱き上げようとしているが、それはとても慎
重だ。

勝蛇は恐れている。自分の手で、双子が傷ついてしまう事を。

——泣いたり怯えて、自分から離れてしまう事を。

これは、ある意味臆病な勝蛇を見守る、十二神将の一日。

???

未だに抱き上げるだけで緊張している勝蛇を見て痺れを切らした
勾陳が、提案した。

「勝蛇、そんなに気にするなら、爪を切ったらどうだ。そのままだ
と引っつく危険がある」

「おお、それはいいな」

言ったのは良いものの、余りにも余りな爪切りの使い方に、彼女
は眉を顰める。

「……待て、不器用すぎるだろう」

「やった事など無いからな」

はっきり言い切り、続けようとしたのを勾陳が止めた。

「貸せ、私が切ってやる。……おい、歯で噛み切ろうとするな」

「駄目か？」

不思議そうな顔をする勝蛇に、勾陳が嘆息する。

「駄目だ。大体、今まで切らなかったのか」

「思いつきもしなかったな」

「まったく……」

勝蛇の言葉に、彼女は深い溜息を吐いた。

???

その様子を見ていた少女が居た。

十二神将が1人、太陰。六歳ほどの幼い外見をしている。桔梗色の瞳で、栗色の長い髪をツインテールに結っていた。

太陰は、顔を引き攣らせながら隣の少年に尋ねた。

「ちょっと、甘い空間が出来ている気がするんだけど。気のせい？」

彼女は圧倒的な通力を持つ勝蛇を恐れていたが、今ではかなりマ

シになっていた。

「いや、私もそう思う」

冷静に答えたのは十二神将が1人、玄武。見た目は太陰同様、子供この姿をしている。

尤も、本当は幾百年、幾千年の時を過ごしているのだが。

『私も、間違っていないと思いますよ』

そう言って顕現したのは天一。十二神将の一人で、優雅に結い上げた陽の光のような金の髪と、晴れ渡る冬空や淡く凍てついた湖にも似た色の瞳の美少女だ。

『まったく、勝蛇はあの双子が生まれた途端明るくなったな』

呆れた様に呟いたのは朱雀。同じく十二神将であり、勝蛇と同じく火将だ。濃い朱色の髪とくすんだ金の瞳を持ち、天一の恋人でもある。

「仕方ないですよ。何せ、清明様と昌浩様に似ておられるのですから」

「そうだな、勝蛇にとって一番大事なのはあの2人だったからな。まあ、俺が一番大切なのは天貴だが」

「朱雀……」

途端に甘い空気を作りだした2人を見て、太陰は嘆息を溢した。

「まったく、この2人も飽きないわね」

「幸せそうだから良いではないか」

まあね、と玄武に返して、太陰は視線を戻した。

ある日の日常1（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願い致します。

ある日の日常2

其の俣勾陳に爪を切られ続けていた勝蛇だが、嫌な神気を感じて振り向いた。

すると、そこにはいつの間にか春輝を抱き上げていた六合と、今来たのだろう男が昌輝を抱き上げようとしている。

「おまつ、何してる！」

勝蛇の怒りの矛先は、六合ではなくもう一人に向いている。

「貴様に教える道理はない」

そう言い放って、男は昌輝を抱き上げた。

十二神将が一人、青龍。不揃いな長くて青い髪と夜の湖のような深い蒼の瞳を持っている。

「お前、昌輝に触るな！気持ち悪い」

「爪など切られている貴様の方が気持ち悪い」

青龍は昌輝に手を伸ばしてきた勝蛇の手を避けて、しっしつと犬を払うように右手を振った。

「昌輝を渡すつもりはない。俺を倒してからにしろ」

「良いだろう、この勝蛇を甘く見るなよ……！」

煉獄の将勝蛇の神気が強まり、同じく青龍の神気も高まったところで、2人の首筋に手刀が走った。

「「がつ」「

「いい加減にしろ。昌輝を巻き込むつもりか？」

珍しく顔に怒りを滲ませた勾陳が2人に諭すと、何か言おう物なら恐ろしい事になる気配を感じ取り、同時に押し黙った。

「それと、今は爪切りをしていたのに邪魔するな」

「「そつちか!?!」「

しない方がいいと分かっているけど、思わず突っ込んでしまう。

「何だ、何か文句があるのか？」

「「……ないです」「

思わず敬語で答えた2人に、勾陳は微笑した。

「先程から声が重なっているな。お前達、実は仲がいいんじゃないのか？」

「「なっ……」「

再度声が重なった2人は、お互いを睨み始める。

「俺の真似をするとはいい度胸だな！」

「貴様こそ辞めろ、気持ち悪い！」

「まあとりあえず、昌輝は私が預かっておこう」

勾陳の思いがけない一言に、2人が固まる。

「おつ、おい、それはないだろう！」

「勝蛇を近づけないなら解るが、俺は関係ないぞ」

「何だと？」

三度お互いを睨み始めた似た者同士に彼女は深い溜息を吐いて、断言した。

「喧嘩ばかりしているお前達は、昌輝の教育に悪い」

「「なら、こいつを近付けなければいいだろう！」」

「??？」

「あの2人は仲がいいですね」

「そうじゃなあ」

太陰達とはまた違う所で見守っている男性2人が居た。

十二神将が1人、太裳。青磁の髪に紫苑の双眸を持つ。

もう一人は同じく十二神将の天空。灰白色の長い髪を持ち、口元とあごに蓄えたひげは胸に届くほどある。

「でも、何時になつたらまともに話せるようになるんでしょうか」

「春輝と昌輝が何とかするじゃろつて」

「そうだといいんですけどね」

太裳が目を向けた部屋の中では、丁度ある1人の女性に依つて収拾がついていた。

ある日の日常2（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなど感想にてご報告下さい。

ある日の日常₃（前書き）

読んで頂き有難う御座います。

ある日の日常3

「「なら、こいつを近付けなければいいだろう!」」

「はあ……」

勾陳がその言葉に深い溜息を吐くと、隣に見知った神将が顕現した。

「どうしましたか?」

「いや、こいつらがな……」

勾陳が経緯を説明すると、女性は目を細めて、言った。

「2人共、……泣きますよ?」

「「ッ!?!」」

睨みあっていた2人を硬直させたのは天后。

長い銀髪に翠色の瞳の十二神将で、水将だ。

「貴方達が口喧嘩をしてる事で、春輝様と昌輝様が喧嘩好きになっただけなの?」

押し黙る2人に、勾陳が非情な言葉を投げかけた。

「春輝と昌輝が歩くか言葉を話せる様になるまで、会えなくするの

はどうだ？」

「なっ」

「待て、勾！赤子が最初に一步を踏み出すのは俺が知ってる限り8ヶ月頃が一番早い。だが、遅いと一歳4ヶ月にもなるんだぞ！それに単語を繋げて喋るのは大体一歳後半。会話が成り立つのは2歳頃だ。8ヶ月でさえも耐えられないのに、もしかしたら2年会えなくなるなんて無茶にも程があるだろう！」

一息に言いきった勝蛇の勢いに、4人が少し後ずさる。

「……勝蛇、お前詳しいな」

逸早く立ち直った勾陳の言葉に、勝蛇は大きく頷いた。

「そりゃ昌浩と明昌から目を離さなかったからな。昌浩は歩くのも話すのも早かったが、明昌は遅くてハラハラしたぞ」

「……そんな細かい所まで覚えてるのね」

「……少し貴様を見直してやってもいい」

「……」

六合を含めて空気が微妙な物になった所で、遠くから事の成り行きを見守っていた太陰が近づく。玄武も慌てたように追いかけた。

「ちょっと、何固まってるのよ。春輝と昌輝と遊んでいい？」

「ああ」

勾陳が返事をする、太陰の爆弾発言が飛び出した。

「よし、じゃあ2人を風に乗せてあげるわ」

「ちょっと待つて」

天后が聊か慌てて声を上げ、

「さすがに危険すぎるぞ」

勾陳が呆れたように呟き、

「貴様の風は荒過ぎる」

青龍が吐き捨て、

「白虎ならまだしもな」

眉を顰めて勝蛇が窘め、

「……止めておけ」

六合でさえも口を出した。

そこに居た5人が同時に否定した事に、太陰は頬を膨らませた。

「何よ、いいじゃない！大丈夫よ、気をつけるもの」

「……太陰」

「あつ、玄武、どこに言つてたのよ。手伝つて」

振り向いた太陰が固まる。視線の先に居たのは玄武だけでは無かった。

十二神将が1人、白虎。肩につかない亜麻色の総髪と灰色の瞳で、かなり身体が大きい。太陰と同じ風将だ。

「何をしている。悪いが、俺はこれから少し用があるから行くぞ。太陰、来い」

腕を掴み、軽々と持ち上げた。そして、其の侂異界へ移動しようとする。

「えっ、待ちなさいよ!」

白虎は抵抗する太陰に構わず、笑つて提案した。

「最高記録を更新してみるか?」

白虎の説教は非常に面倒くさい。そして今の最高記録は6刻——12時間。という事は、12時間以上になると言つ事で……。

「絶つつつつ対嫌つ!」

青くなってブルブル震える太陰に微笑して、白虎は太陰と隠形した。

太陰が異界に連れて行かれた事で、一同は息を大きく吐き出した。

そこで勝蛇がある事を思い出して勾陳に尋ねた。

「おい、勾、さっきの如何だったんだ！？……2人に会えなくなるのか？」

殆ど見る事が無い悲痛な表情で詰め寄った勝蛇を見て、

「ああ……もういい、好きにしろ」

さすがに勾陳も面倒臭くなって諦める。

「という事は、俺も良いという事だな」

青龍の言葉に、即座に勝蛇が目を向けた。

「お前には良いって言ってないだろう」

「言ったような物だ」

「2人共、止めないと泣きますよ？」

天后の言葉に再度2人が硬直する。

「まったく……本当に、いつも通りだな」

勝蛇と青龍が双子（特に昌輝）を取り合い、

勾陳が諫め、天后が脅し、六合が呆れ、

太陰が暴走し、玄武が慌て、白虎が怒り、

天一と朱雀が桃色の空気を作り出し、

太裳と天空が全てを見守る。

でも、こういう日々も悪くない。

ある日の日常³（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願いします。

言葉（前書き）

お気に入り登録と評価、有難う御座います。

調子に乗ってもう一話投稿です。

言葉

日射しが強くなって来た、初夏。

少し前に春輝と昌輝が非常に頼りないが歩けるようになった事で、みんな喜んでいたのだが、勝蛇と青龍が一際喜んで居たのはまだ記憶に新しい。

勾陳が自室で読書をしていると、物凄い勢いで扉が開き、勝蛇が入って来た。

「勾！聞いてくれ、2人がもう少しで俺の名前を呼べるぞ！」

「そうか」

生粋の双子ばかだな、と思った事は言わないでおく。

導かれるまま居間に行くと、勝蛇と勾陳以外の十二神将と吉昌と露菜が揃って揺り籠を覗き込んでいた。

「お前ら、さつきは誰も居なかったのに何で居るんだ」

不機嫌そうに呟いた勝蛇に、青龍が双子から目を離さず答えた。

「貴様が居なくなるのを待っていたに決まっている。それより、まだ俺の名前が呼べていないから居なくていい」

「何だと、お前こそ何処か行けばいいだろう」

見かねた天后が口を出した。

「2人共、止めないと泣きますよ?」

勝蛇と青龍が硬直する。

いつものやり取りが行われる横で、勾陳が呆れて進言した。

「大きいとはいえ、揺り籠を覗き込むのは息苦しいだろう。籠から出してやったらどうだ?」

「そうですね、そうしましょう」

勾陳の言葉に頷いた吉昌が、双子を床に下ろした。

「あー、おー」

「えー、うー」

床に手を着いてから改めて立ち上がった2人を14人が取り囲む。

何人かが口々に自分の名前を繰り返して言わせようとするので、
天后が再び牽制した。

「皆さん、静かにしないと泣きますよ?」

その言葉に名前を繰り返していた神将はビクツと身体を震わせて、
一様に黙った。

その様子に天一が微笑んで、

「皆さん、2人が最初に名前を呼ぶべきなのは吉昌様と露菜様ではないでしょうか？」

「天貴の言う通りだ。両親なんだからな」

朱雀は天一に甘いが、それでも正論は正論なので、渋々ながらも神将達は道を譲る。

「ありがとうございます」

吉昌が礼を言っ、露菜がそれに続いた。

「春輝。お父さん、です。言ってみてください」

「お父さん。お父さん、ですよ」

2人が春輝に向かってそう繰り返すと、舌つ足らずだが

「おとーしゃ？」

名前を呼んでもらった吉昌は破顔して、春輝の頭を撫でた。

「そうです、よく言えました」

「次は昌輝ですね。私でもいいですか？」

「ええ、もちろん。お母さん、お母さん」

すると、昌輝も露菜の名を呼んだ。

「おかーしゃ」

「はい、はい。すごいですね」

その様子をつずつずして見守っていた紅蓮と青龍が、痺れを切らした。

「次は俺じゃ駄目か？」

「何を言う、俺に決まっているだろう」

「……春輝様が青龍、昌輝様が勝蛇で良いんじゃないですか」

「そうか！」

勝蛇は天后の言葉に顔を綻ばせた。

言葉（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願い致します。

名前（前書き）

読んで頂き有難う御座います。

名前

全員が昌輝に注目する中、勝蛇は自分の名前を繰り返した。

「勝蛇」ではなく、清明から貰った「紅蓮」という2つ名を。

「紅蓮だぞ、昌輝」

昌浩の見鬼の才が清明によって一度失われ、戻った時。勝蛇は、物の怪の姿で昌浩にこの名を教えた。

「紅蓮」の名は、清明に名付けてもらった、唯一無二の至宝だ。

懐かしい声が脳裏に蘇る。

——地獄の業火など、誰が言ったのか。まるで、水面に咲き誇る紅の蓮の様ではないか。

「紅蓮だ、紅蓮……紅の、蓮だ」

「れーん……」

勝蛇は目を見開いた。——人の世では遙か昔。

昌浩も、見鬼の才を失った後まで、「れーん」と呼んでいたのだ。

硬直している勝蛇の指を掴み、昌輝は笑った。今までで最高の笑顔で。

???

時が経ち、単語をかなり覚え、会話が成り立つようになってきたある日。

春輝が外に行きたいと言い出した。

「らん、そと、いく」

因みに、青龍は双子に「青龍」ではなく、2つ名の「宵藍」と呼ばせている。

勝蛇と揃って双子ばかりである。

「外だと？危ないから駄目だ」

「やあ、いく」

青龍が突っぱねても、春輝は諦めない。只管に外へ行きたいと言いつける。

すると、それを見ていた昌輝も、隣に居た勝蛇に言った。

「れーん、いく、そと」

「……おいおい」

溜息を吐いた勝蛇に続いて、青龍が言った。

「もし変な奴にでも会ったらどうする」

「れーんがまもってくれる」

「らん、まもって」

「……」

こう言われると、自分を信頼しているのだと分かって無下に断れない。

言葉を探しあぐねていると、隣に2つの神気が顕現した。

「どうかなさったのですか？」

不安そうに天一が尋ねると、朱雀が天貴にこんな顔をさせるな、と無言の怒りを向けてきた。

俺は悪くない、と不満げな表情を浮かべながら勝蛇が経緯を説明する。

「そうですね、確かにちよっと心配です」

「だが、それだと堂々巡りになるぞ。行った方がいいんじゃないか？ 離れないなら大丈夫だろ」

朱雀の一言に、その場の神将が押し黙る。

「……仕方ない」

「貴様……」

勝蛇に青龍が殺気を放つが、受け流す。

「十二神将が全員付いていれば、さすがに問題ないだろう」

青龍の殺気が和らいだ。

「極偶に、少しは役に立つ事を言っな」

『ちよつと待て』

納得しかけた青龍を止めたのは、勾陳。騒ぎを聞きつけ異界から降りてきていた。

名前（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願い致します。

鬼ごっこ？（前書き）

読んで頂き有難う御座います。
あらすじを少し変更いたしました。

鬼っつー？

深い溜息を吐きだして、呆れ混じりに勾陳は言った。

「吉昌は今日も仕事だろう。家に残る留守番といい、全員付ける訳には行かないな」

「勾、ならば2人の安全が無くなっても良いというのか？」

十二神将最強の闘将の視線を受けて、そもそもお前ら2人いれば
そうそう危険は無いだろうという言葉を飲み込んだ。

言おうものならとても素晴らしい双子ばかりが発揮される事
受け合いだからだ。防御が無いとか何とか。

「私を含めた闘将4人と、防御に天空、風読みに白虎、水鏡に天后
で良い。吉昌は残りが何とかする。流石にこの面子なら安全だ」

何か合っても太陰の風と玄武の水鏡で直ぐに伝わるだろう。

隠形していた六合が顕現し、自分も賛成だと頷く。

それでもやりすぎだろう、という朱雀の視線を勾陳は黙殺した。

???

「れーん、あっち！」

「おいつ、ちょっと待て昌輝！」

町に出た途端、勝蛇の腕から降り、手を掴んで走り出した昌輝に、勝蛇はなす術も無く引き摺られて行く。

全く以て関係無いが2人の体格差が大きい為、勝蛇がかなりみつとも無く見える。

その様子を微笑ましく見ていた天后が、不意に顔を青くする。

「ねえ……春輝と昌輝以外は、顕現してても只人の眼には映らないんじゃないかしら？」

——つまり、昌輝は一人でふらふらしている子供に見える。

???

「昌輝、一回家に戻るぞ」

「やー！」

神将の内の誰かが人化し、家に戻って服を着れば保護者に見えるだろうと思いはするものの、昌輝が幾ら言っても止まらない。

「おい貴様、何をしている！」

若干焦った声で青龍が怒鳴る。

「抱き上げなさい、勝蛇！」

天后の言う通り抱き上げようとしたが、巧みに避けて捕まらない。

まだ2歳なのに。齒噛みしたところで、勾陳が至極簡単な手段を
思いつく。

「私は先回りしよう」

「ではわしは右に回ろう」

「じゃあ俺は左だな」

勾陳の思惑を正しく理解した天空と白虎が左右に分かれる。

「……止まれ」

六合が呟いた時、昌輝が転ぶ――

「昌輝！」

――前に体勢を整えた。

双子以外の全員が息を吐いた隙に、昌輝は神将達の間をすり抜ける。

「ましゃ、がんばれ」

六合の腕の中から、春輝が笑いながら声援を送ると、昌輝は嬉しそう
な声で答えた。

「あい！」

「「「「「「「「「
あ、い、じ、や、な、い、！
「「「「「「「「「

鬼ごっこはまだまだ終わらない。

鬼ごっこ？（後書き）

手違いで、オリジナル作品扱いになっていたようです。
誠に申し訳ありませんでした。

引き続き、誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願い
致します。

人化

「や、やっと捕まえた……」

数十分後。漸う昌輝を捕まえた7人の神将は、深い息を吐いていた。

「あそぶの、め？れーん」

涙目で勝蛇を見上げる昌輝。

「耐えて、勝蛇……」

「この時ばかりは貴様に同情する」

「負けるなよ」

「言ってる傍から降ろすな」

「危険に晒されてしまうぞ」

上から天后、青龍、勾陳、白虎、天空である。

正直、神の末端である十二神将が幼児一人にここまで苦戦させられるというのも如何なのだろうか。

降ろしたら昌輝が危険、昌輝が危険――

念仏の様に唱えていた勝蛇の耳に、声が聞こえた。

「れーん、おねがい……」

何時もなら笑顔なのだが、今は泣きだしそうな悲痛な表情で言っていて、それがとても痛々しく、思わず願いを聞いてしまいそうな――

「だから、降ろすな」

珍しく入った六合の突っ込みに、勝蛇は我に返った。

???

「それで、誰が人化しますか？」

天后の一言で、勝蛇と青龍――2人の双子ばかりが考えた。

人化していない者が双子を抱っこすると、傍からは宙に浮いている様に見えるだろう。つまり、2人を抱き上げ続けるためには、人化する事になる。

「俺がする」「」

口が揃った事を理解すると同時に、相手を睨みつける。

火花が鳴った幻聴が、その場に居る全員に聞こえる。

「2人に近付こうとしても俺が止める」

「それはこちらの科白だ、貴様なんぞに渡さん」

最早恒例となっているやり取りを、神将達は呆れた目で見ていた。

「成長とかしないのかしらね」

胡乱な目で天后が言つと、勾陳が深い息を吐く。

「少なくとも今は無理じゃないか？……その内、春輝と昌輝が何とかしそっだが」

それに、白虎が合点が行ったように首を縦に振る。

「春輝なら、それを逆に利用しそっではある。清明に似てるからな」

天空も生温い目で2人を見守りながら言つた。

「昌輝は、素直さで誤魔化すかの。誤魔化すつもりなどないかもしれんが」

ニヤリと笑いながら、鬨将紅一点は少し声を低くした。

「『2人には仲良くしてもらいたんだよ、俺にとって大事な仲間だから』とか言つてな」

「で、純真無垢な目で見つめるのよ」

「結果、あいつらは何も言えなくなる」

3人で頷いているのを見て、翁は表情に苦笑を滲ませる。

「昌浩に重ね過ぎじゃ」

そうは言うが、発端は天空である。

「だって、余りにも似てます。まるで、昌浩様の幼い頃に戻ったみたい」

「時は経ってしまったが、あの4人は変わらないんじゃないか」

勾陳がそう言うと、今まで隠形していた神将が顕現した。

「……せめて、もう少し打ち解けるべきだろう」

「違うない」

六合の呟きに、白虎が笑って答える。

そして、まだ口喧嘩が続いている2人を見て、そろそろ実力行使に入るだろうと狙いを付ける。

「貴様、覚悟しろ」

「お前に最強の名は伊達じゃないという事を教えてやる」

予想通り。

「止めないと、泣きますよー」

「ッ」「ッ」

本当に泣くはずもないのに、それで止まってくれるのが勝蛇と青龍らしい。

「れーん、おこるの、めっ」

「す、すまん」

「らん、こわいかお」

「……悪い」

闘将2人の情けない様子を見て、全員が笑いだす。

願わくば、安穩で平和な日々が続く事を――

人化（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願い致します。

浮気？

最近、露菜の様子が可笑しい。

幼心にそれを感じ取った春輝と昌輝は、珍しく一緒にいた兄の昌親に聞いてみた。

「おかあしゃ、だいじょぶ？」

これは昌輝。

「うん、大丈夫」

「ほんと？」

そして、これは春輝。

「本当だよ」

双子の代わる代わるの質問に笑みを浮かべて、昌親は2人の頭を撫でる。

「というか、勝蛇は如何した。いつも傍に居ただろう」

急遽子守に呼ばれた10歳の長男と8歳の二男は、その理由を知らない。

正直勝蛇は怖いから居なくて安堵しているのだが、いつも一緒に居るのに何故と、疑問にも思う。

「れーんはねえ、こーちんといっしょなの」

昌輝が答えを述べるが、新たな疑問が浮かんでくる。何をしているのか。

「こうちん、おこってるの」

少し昌輝より発音が確りしている春輝が答えを述べる。

あの勝蛇が怒られる？十二神将最強で最凶のあの勝蛇が？

聞けば、怒っているのは闘将2番手の勾陳だと言う。それでも、俄かに信じられる話ではない。

「何を怒っているんだい？」

昌親の問いに双子の兄は首を傾げたが、代わりに弟が答えた。

「れーんねえ、うわきなの！」

「「ぶっ」「」

思わず嘖き出した2人を置いて、春輝が訊ねる。

「うわきつてなーに？」

「しらなあい。でも、こーちんいつてた」

ニコニコ笑う昌輝。

「う、浮気って」

「一体何が起こっているんですか」

そこへ、人化した十二神将太裳が歩いて来た。

「おやつを作りましたよ。って、如何しました？」

答えられない程動揺している兄達を余所に、双子はおやつに飛び付いた。

期待した目で見つめてくるので、とりあえず双子に食べさせる。

「今日はプリンアラモードです。で、何があったんですか」

改めて聞くと、今度は確り答えが返ってきた。

「その、昌輝がな。勝蛇が……あー」

が、どうにも齒切れが悪い。

「言っているのかな」

昌親も困惑している。

逡巡する2人を眺めていた太裳は、ある事に思い付いて手を叩いた。

「もしかして、勝蛇が浮気した事ですか」

納得したように微笑む太裳に、成親が詰め寄る。

「知ってるのか。如何言う事だ？」

「兄さん、聞かない方が……」

「何言ってるんだ、聞かずにいられるか」

目を輝かせる長男に、次男は嘆息した。

「大した事じゃありません。痴話喧嘩ですよ」

「「は？」」

2人同時に目を丸くする。

「ほら、私達は人化して、買い物に向かうでしょう。当番を決めるんですよ」

そして、今日は偶々勝蛇の番だったそうだ。

品ぞろえの多いデパートで何時も通り食料を大量に買い込み、車に乗せて家に向かった。

その途中で胡椒を買い忘れた事に気付き、近くのスーパーで買う事にした。

そこで、買った後、女子大学生に遊ばないかと誘われたそうだ。つまり逆ナン。

「人化したら、少し綺麗な顔立ちになるでしょう。だからだと思います」

ここで、少しどころでは無いと思った兄弟は間違っていない。神将の美しさはそれだけで人を超えている。

兎も角、その場面を偶然目撃した勾陳が、家に帰った後異界で説教をしているという事だ。

「痴話喧嘩以上の、何物でもないでしょう?」

ニツコリ笑って言った太裳に、成親がうんうんと頷いた。

浮気？（後書き）

読んで頂き有難う御座います。

誤字脱字、その他アドバイスなどご報告お願い致します。

出産（前書き）

長いです。

いつもの倍です。

まあ、他の小説様と比べると全く長くないと思いますが……。

出産

「確かに、そうとは思えんなあ」

「そうですね」

昌親も首肯する。

「ほら、早く食べて下さい。夕飯が食べられなくなります」

そういつて、太裳がプリンアラモードを差し出す。

「ああ、わかつ——」

「皆様!—」

返事を返そうとした成親を、居間に飛び込んできた天一が遮った。

「無事に、お生まれになりました!」

「——はい?」

「そうですね、よかったです」

首を傾げる兄弟に、天一が訝しげな目を向け、太裳に移した。

「露菜様が妊娠されている事を話さなかったの?」

「忘れてました」

飄々と微笑んだ太裳に、思わず成親は脱力する。

「おいおい……」

「まあ良いじゃないですか、兄さん」

兄を諫める昌親の服が、不意に引つ張られた。

「ん？何だい、春輝」

小さな手で袖を掴んだ春輝が、問う。

「おうまれ、つてなあに？」

「ああ……そうだね。ほら、昌輝も来なさい」

離れた所で様子を見ていた昌輝が、呼ばれて近寄ってくる。

「2人はね。お兄ちゃんになるんだよ」

「おにーちゃん？」

異口同音に疑問を浮かべた双子に、長男が頷いた。

「ああ。……待てよ、おい、妹か、弟か？」

視線を向けられた天一が、笑みを浮かべて答えた。

「女の子でございます」

???

6人は一緒に吉昌と露菜の寝室に向かった。

扉を開けると、異様に人口密度が高い事に、成親が眉根を寄せた。

「一体何人いるんだ」

「16人です」

太裳の答えに、昌親が目を見張った。

「それはまた……多いですね」

十二神将が9人。安倍家の人間が7人。

この部屋も広いのだが、さすがに16人もいるとそうは感じられない。

ある意味、窮屈さも感じない安倍家の敷地の広さには感嘆を覚える。

「「おかーしゃー!」」

「まあまあ、元気ですね。貴方達に、妹が出来るのです。分かりますか?」

駆け寄って来た双子を抱きしめた母の露菜は、改めて確認する。

「「はい」」

微笑みながら、露菜は揺り籠に入っていた赤ん坊を抱き上げた。

「ほら、見て下さい」

双子は赤ん坊を見つめる。

赤子は、双子に気付いて視線を向けてくるが、無表情だった。

「わあ」

「……おかーしゃ、このこわらないよお？」

春輝の疑問に、露菜が困惑する。

「貴方達でも駄目でしたか……笑ってくれないと不安ですね」

「ええ……」

今まで静かに見守っていた吉昌が、沈痛な面持ちで頷く。

その時、苛烈な神気が顕現した。

現れたのは、ここに居ない神将の3人の内の2人。

凶将、勝蛇と勾陳。

顕現と同時に身を震わせた父と兄弟を黙殺し、勝蛇は部屋を見回した。

「赤ん坊が生まれたと聞いたんだが……」

「ああ、勝蛇さん。この子ですよ」

勝蛇を恐れない肝っ玉の露菜が赤ん坊を掲げる。

勝蛇が覗き込むと、赤子は泣かず笑わず、黙ったまま見返して来た。

「……泣きも笑いも喋りもしないのは初めてだな」

「ほう？露菜、私にも見せてくれ」

それを聞いた勾陳も見つめてみるが、やはり赤子は何の反応もなかった。

その様子を見ていた吉昌が、驚愕に顔を染めた。

勝蛇に怯えないのは、双子だけかと思っていたのに。

そんな吉昌を余所に、勝蛇が反応が無いのはつまらないな、と方向性の違う考えをしていると、右足に何かが激突した。

「うおっ！……昌輝か、驚かせるな」

瞬間、勝蛇は笑顔になり、目線を同じ高さにする為屈んだ。

「れーん！おれ、おにいちゃんだってー」

「そうかそうか、良かったなあ」

抱きついて来た昌輝を受け止める。顔を近付けすぎると途端に金冠を弄り始めるので、頭との距離は保つ。

滅多に、というか全然見ない勝蛇の笑顔に、吉昌と成親と昌親は驚く。

十二神将は勝蛇の変わらない双子ばかりに、半ば呆れてそれを眺める。

全員が買い出しに行っていた神将の神気を感じた。帰って来たらしい。

「りくごうだよ、らん」

「ああ」

春輝に青龍が無愛想ながらしっかり答える。

買い物に行っていたのは六合。拘りの食材があったらしい。

そう経たない内に、荷物を台所に置いて来た六合が部屋に入ってきた。

「あつ六合。この子抱っこしてみて」

露菜が、最後の一人に赤子を渡した。

六合の腕に抱かれた途端、赤子は笑った。

幼児らしい、純粹な笑みで。

色々な事で呆けていた成親が、我に返って吉昌に聞いた。

「お父さん、名前は何なんです？」

「ああ、——風音だ」

「「「「え？」「」「」

「「「「「は？」「」「」「」

驚愕した神将達が同時に声を上げる。

天空が、声を出さずに、珍しく目を開く。

六合が、笑い続ける赤子を抱きしめた。

その翌日から、無口で無表情な神将が生まれたばかりの赤ん坊を
甲斐甲斐しく世話する様子が見られたとか……。。

出産（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願い致します。

登場人物（前書き）

今出ている人のみです。

話が進むごとに、加筆・修正していこうと思います。
ネタバレ注意です。

12 / 13 ・ 14、神将追加&修正

登場人物

登場人物

安倍家

○安倍昌輝

安倍吉昌と露菜の息子であり、成親、昌親、春輝が兄、風音が妹。成績も良く、運動神経も良く、人当たりも良い優等生の双子の兄。春輝が居る為、何かと比較される事が多い。至る所で「春輝の弟」と呼ばれた事の影響で、そう呼ばれるのを嫌っている。

霊力は高い。見鬼の才も持つ。

春輝とは双子であるが2卵生双生児、顔はあまり似ていない。女顔である。肩より少し長い漆黒の髪と目を持つ。

素直でお人好し。基本的に優しく、本気で怒る事は少ない。負けず嫌いの一面がある。

物の怪のもつくんの本性、凶将勝蛇を知り、恐れず、紅蓮が物の怪姿の時は自身が名付けた「もつくん」と呼び、とても仲が良い。4闘将の2つ名を知っているが、普段は六合と勾陳の名を呼ばない。

○安倍春輝

昌輝の双子の兄である。昌輝と同等の霊力と見鬼を持つ。

一度決めたら譲らない頑固な性格。常に昌輝をからかっているが、本当はとても大切に思っている。

落ち着いた雰囲気的美青年。漆黒の瞳、髪は腰まで届くほど長い。旋毛で一つに纏めている。

○安倍風音

安倍家の子供の中で唯一の女の子で、末っ子。

霊力は昌輝と春輝より高い。見鬼もある。

赤子の時は六合以外の前で笑う事が少なかった。成長すると同時に改善される。

子供の時から六合の2つ名を知り、常にそう呼んでいる。

○安倍成親

印刷会社に勤める。安倍家の長男で、風音とは年が一回り分離れている。

霊力は昌輝達に比べると劣るが、世間一般としては多い。

狸ぶりは変わらない。同僚の女性と結婚している。

物の怪の本性を知り、恐れると同時に双子を守ってくれている事に感謝している。

剣の心得がある。

○安倍昌親

安倍家の二男で、アナウンサー。成親の2歳年下。

霊力は成親と同等。結婚したばかり。

温厚で真面目。兄弟で最も吉昌に似ている。紅蓮を恐れている。太衰から直伝で弓を習う。

○安倍吉昌

表は天気予報士。裏で陰陽師として活動する。成親、昌親、春輝、昌輝、風音の父親。

真面目で優しく、家族を大切にしている。

少し狸らしい所もある。元十二神将の主。成親と昌親程ではないが紅蓮を恐れる。

武術には向いていない。

○安倍露菜

吉昌の妻。陰陽師の時は助手となる。

朗らかな性格。紅蓮とはあまり接点が無いが、恐れてはいない肝っ玉の持ち主。

短剣を勾陳に師事する。

十二神将

○勝蛇／紅蓮／もつくん

昌輝と春輝の護衛。2人の事をとても大事に思っている。

本性は、十二神将最強で最凶の闘将、騰蛇。

精悍な顔つきに、深い紅の髪と黄金の双眸をもつ。褐色の肌で、一切の無駄のない逞しい体躯をしている。我を忘れると金の眼が深紅に染まる。

圧倒的な通力に人は恐れを抱き、同胞からすらも疎まれていた。

平安の世、清明に、彼の発する炎が水面に咲き誇る紅の蓮のようだと二つ名「紅蓮^{ぐれん}」を与えられる。清明のほかは昌浩、明昌、昌輝、春輝、（安倍）風音がこの名前を呼ぶことを許された。

その苛烈な通力に怯え、赤子は側にいるだけで泣き喚くが、前述

の5人は泣かなかった。

榎？斎の縛魂術に操られて晴明を殺しかけ、術が解けた後、事実を知って逆上のあまり？斎を殺そうとしてしまふ。その後風音に再び縛魂の術をかけられ、昌浩を瀕死にし、結果3度の理を犯してしまふ。

昌浩が生まれた時を境に、少しずつ変わっていった。今では十二神将全員と普通に話す事が出来る。

危険時以外、異形の姿をしている。小さな犬程の大きさ。長い耳とかわいい顔で兎に似ている。体毛は白だが、額の模様や回りを一巡している勾玉のような突起は赤い。瞳の色は昌浩と昌輝曰く「夕焼けの瞳」。昌輝及び風音に「もっくん」と呼ばれている。

十二神将の中では勾陳と仲が良い。2つ名を知ってから、言霊で呼ぶことで心は無条件に縛う事を避けるため、彼女を「勾」と呼んでいる。

○勾陳／慧斗

紅蓮と同じく凶将で、4闘将2番手。

肩に付かない位置で切りそろえた漆黒の髪に黒曜の瞳を持つ女性。暴走すると黒曜の瞳が金色に変わる。武器は二振りの筆架叉。

左利きである。最初に気付いたのは紅蓮。

二つ名は常に大局を見据えることから「慧斗」。

普段は理性で力を制御しているが、瀕死に陥るなどして理性の制御が外れ本能のみの状態になると暴走してしまい、その際には、制止することが可能なのは紅蓮のみ。

○青龍／宵藍

四闘將の一人。勾陣に次ぐ通力を持つ。不揃いな長く青い髪と深い蒼の瞳を持っている。瞳は激すると赤紫や青紫に変わる。

頑固者であり、口調は冷やかで厳しいが、常に同胞や昌輝たちを気に掛けている。天后に対して分かりにくい優しさを向ける事もある。

緊張感に欠ける太裳には苛立つ事が多いが、まるで漫才のよう。

昌輝と春輝を紅蓮と同じく大切に思っており、紅蓮と度々反発するが、傍から見ると似た者同士のやり取りである。

晴明による二つ名は、穏やかな宵の空のように頑固を直してくれればという願いを籠められた「宵藍」である。

○六合／彩？

通力は四闘將中で最も弱い。黒い霊布や甲冑、鎖等は戦闘時の神通力不足を物理的に補う物。

腰の辺りで括った鳶色の髪と、黄褐色の瞳。激昂すると緋色に変わる。

普段から、風音以外に何か言われても気配で応答する程無口で、余り表情を変えない。

晴明による二つ名は、夜明けの光に似ている瞳から「彩？」。晴明と昌浩、風音、昌輝と春輝のみが呼ぶ権利がある。

平安時代も風音と相思相愛だったが、現代でも風音を大切に思っており、彼女を守るためなら躊躇い無く行動する。風音の護衛にしている。

○朱雀

紅蓮と同じく火將。六合に次ぐ通力を持ち、神將五番手である。

浄化の炎を操り、唯一「神将殺し」の力を持ち「同族殺し」を許された神将である。濃い朱色の髪とくすんだ金の瞳をしている。恋人である天一のことが何よりも大切に、天一がからむと人が変わる。

嫌いなことは天一が術を使うことと、清明や天一に叱られること。頭に巻いている白い布は天一の領巾。大親友だった先代の天一が、努力叶わず目の前で絶命してしまった過去がある。その為、生まれ変わった現在の天一を何より大切にしている。

○天一／天乙貴人

豊穰を司る。本名は天乙貴人で、朱雀のみ天貴と呼ぶ。朱雀の最愛の恋人。

優雅に結い上げた陽の光のような金の髪と、晴れ渡る冬空や淡く凍てついた湖にも似た色の瞳の美少女。儚げな印象だが芯が強い。呪詛や傷を自身に移して浄化する力「移し身の術」を持っている。この術で何度か瀕死の事態に陥ったことがあり、朱雀は彼女がこの術を使うことを非常に嫌う。

身に着けている耳飾りは朱雀のもの。十二神将の中で唯一死を迎え再生された神将であるが、その原因は朱雀が沈黙している為不明。

○太陰

風将。風の扱いが荒く、風読みなど細かい事は苦手。十二神将六番手。

桔梗色の瞳、栗色の長い髪を耳の上の高い位置で結っていて、六歳程の幼い外見。気が強いが、繊細で打たれ弱い一面もある。

白虎の説教が苦手で、最高記録は6刻〓約12時間。水将の玄武

とは仲が良く、大抵行動を共にしている。

○玄武

水将。見た目は太陰同様、子供の姿だが、口調は重々しく冷静沈着、一人称は「我」。

太陰と一緒にいて、振り回されることも良くあり、とぼつちりを受けることもある。結界を張ることのできる4人の中では一番通力が弱い。

○天后

玄武と同じく水将。

銀髪に翠色の瞳。優しく柔軟な性質ではあるが、曲がったことが嫌い。青龍と一緒に居る事が多く、頑固な点が似ている。

勾陳とは仲が良い。

○白虎

太陰と同じく風将。肩につかない亜麻色の総髪とくすんだ灰色の瞳、大きな体躯。

通力を使う以外に肉弾戦をすることもある。主な役目は太陰へのお説教役。その説教は非常に長く懇々と説く物で、太陰が苦手としている。

太陰の苦手とする風読みなどを得意とし、速さは太陰に劣るが穏やかな風を操る。

○天空

土将。灰白色の長い髪を持ち、口元とあごに蓄えたひげは胸に届くほど。

顔には皺があり老人の姿をしている。十二神将を束ねる役目を担う。

十二神将の殆どが「相手にしたくない」と言うほどの人物である。青龍や勾陣を「若造」「跳ね返り」と呼ぶほどで、戦う力は持つていないものの、織り成す結界は十二神将随一であり、異界から通力を飛ばすだけでもほぼ完全に敵の動きを封じることができ、神将中で唯一紅蓮の神気を一時的とはいえ封じる程である。無機物を造る力を持っており、十二神将、成親・昌親の武器はほぼ彼が作った。

○太裳

土将。青磁の髪に紫苑の双眸。神将の中で二番目に強力な結界を張ることができる。

穏やかな性格をしていて、誰に対しても丁寧な口調で話す。傍から見ると青龍をおちよくっているとしか思えない発言が多く、自分が青龍を怒らせていることに気づかず一人話が続け、だいぶ時間が経ってからようやく青龍が怒っているのに気づき、正座して謝罪するということも。

普段はあまり姿を見せない。

登場人物（後書き）

明日、第2章に入ります。

朝（前書き）

第2章に入ります。

朝

微睡む意識の中。

彼はぼんやりと天井を見つめていたが、突然起き上がると、どたと着替え始めた。

終わると、自室から出て全力疾走で居間に向かう。毎朝、何故こんなにもこの家は無駄に広いんだろうと疑問に思う。

扉を勢いの儘開け放って、怒鳴った。

「何で起こしてくんなかったんだよ、もっくん！」

???

怒鳴ったのは安倍昌浩、現在13歳の中学2年生。明日で誕生日を迎え、14歳となる。

「何でって、お前俺がどれだけ粘ったと思ってんだ」

飄々と答えたのは、白い体毛の異形。大きな猫か小さな犬のような体躯と、長い耳。額に花の様な模様があり、首回りには勾玉のような突起が一巡していて、瞳は夕焼け色だ。

「うっ、完全に起きるまで起こすとか……」

「寝ながら抵抗しただろ。自業自得だな、春輝の弟の昌浩や」

笑いながら告げると、昌輝はきつと物の怪を睨みつける。

「弟言うな。俺は『春兄の弟』じゃなくて『安倍昌輝』だって言うてるじゃないか。物の怪のもっくん、しっかり覚えといてよ」

肩を怒らせる昌輝に、物の怪が反論する。

「そっちこそ物の怪のもっくん言うな。このプリティでビューティフルな俺様の何処が物の怪に見えるんだ」

「え、何処って全部」

「なにおう!？」

舌戦を繰り広げる2人に向かって、彼が手を鳴らして気を引く。

安倍春輝。昌輝の双子の兄だが、容姿はあまり似ていない。性格は……推して知るべし。

「はいはい、お前達は本当に騒がしいな。少しは静かに朝食を食べようとは思わないのか。それと昌輝、起きるのが遅い。俺の教育が悪かったか。春兄は悲しい、悲しいぞ」

うつつと目元を拭っているが、口元が愉悦に歪んでいる。

「あのね、春兄と俺は同じ年だよ。教育も何も無いから」

呆れる昌輝の反論を聞き、腕を組んで遠い目をする。

「いやいや、兄としての苦勞は数え切れないんだ。例えば、3歳の

時に――」

「ちょっと待って、3歳の時の事なんか覚えてるはず無いでしょ」

兄は一瞬目を丸くして、笑った。昌輝曰く狸の笑み。

「十二神将が知っているとは思えないのか？現に、俺は勾陳に聞いた」

瞠目して、背後を振り返る。

「勾陳、何教えてるのさ」

顕現した長身の神将は苦笑して、

「別に教えて困る人が居ないから良いだろう」

「俺が困る。あの狸にそんな事を教えたら――」

「昌輝。何を話しているんだ？まさか思い出を語らないでくれとでも言っているのか。うつつ残念だ、思い出を大切に出来ないなど。

ああ俺は昔の素直な昌輝が懐かしい。あの可愛い昌輝はどこへ……」

再び目元を拭う真似をしながら、ちらりとこちらを見て来るのが恨めしい。

「こんの……、狸兄貴……！」

物の怪が顔を上げると、必死で怒りを堪えているらしい昌輝が目に入った。

春輝……お前、その内嫌われるぞ……。

朝（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願いします。

学校（前書き）

読んで頂き有難うございます。

学校

ふと、物の怪は目を細めた。

清明にも、同じ事を言っただけ……。

そこで、2階から12歳になった妹の風音が降りて来た。今は小学6年生である。

風音はリュックを背負って、ソファに座って新聞を読んで待っていた六合に告げた。

「待っていてくれてありがとう、彩？。行きましょう」

「ああ」

朝は、六合が言葉を発する数少ない時間だ。

「兄さん達おはよう」

「うん、おはよ」

「ああ、おはよう」

「もう成親兄さんと昌親兄さんは行ったのね。私は日直だからもう行くけど、昌輝兄さんはまだ朝ご飯食べて無いの？」

風音は自室に戻って荷物を取りに行っていたので、もう食べ終わっていた。

「食べないと遅刻するぞ」

春輝が冷静に告げると、昌輝は慌てて目玉焼きに手を付ける。

「えっ？ わつ、急がないと」

春輝はもうとっくに食べ終わっているのに、登校せず弟を待っている。昌輝は全く気付いてないが。

素直になる必要があるのは、昌輝よりお前だよ……。

そう思って、物の怪は嘆息した。

???

学校に登校した3人を迎えたのは、藤原彰。双子の幼馴染だった。

「おはよう、3人とも。ねえ、私は明日の昌輝と春輝の誕生日、家に行っていいの？」

「もちろん。待ってるよ」

物の怪は彰を改めて眺める。見ればみるほど平安の彰子に似ているものだ。

だが本人には記憶が無いらしい。それは昌輝には昌浩の、春輝には清明の記憶が無いのと同じだ。

まだ来ていないようだが、彰には、章という平安の章子とこれま

た良く似た同い年の従姉妹が居るというのに。

「……もつくん、どうかしたの？」

「いや、何でも無い」

4人が平安時代の4人とそれぞれ瓜二つだというのは十二神将の中で周知の事実だが、本人達にその自覚が無いのだから仕方ない。

この前勾陳が、神将だけが集まった異界で、重なるのは控えようと言っていた。その方がいいと物の怪も思う。自分の知らない人と似てるなど言われても、困る事は目に見えているのだから。

「一時間目は昌浩が得意な歴史ね」

「寧ろ、歴史しか得意じゃないと言った方が正しい」

「うるさい春兄」

何故か昌輝は歴史が好きで得意だ。何でも、昔の人がどのように行動していたかが気になるらしい。

「ま、頑張れや春輝の弟」

「弟言っなっ」

周りの目があるので小声になっているが、それでもしつかり反論する昌輝に、物の怪は苦笑した。

そこに、彰の従姉妹の章が教室に入ってきた。

そして4人で仲良く話し出す。章の違うところは、見鬼の才を持っていることだろうか。

まあ、似ていても似ていなくても別に良い。4人の近くにさえ居られれば。

???

昼休み。

「うう、終わったあ……」

「お疲れさん。にしても、あいつも良くやるよなあ」

「ああ、春兄？俺もそう思うけど、あれは狸だよ」

昌輝の言い草に苦笑して、教壇を眺め遣る。

そこでは、春輝が先生に質問していた。熱心な事だ、将来間違い無く使いそうに無い内容なのに。

ちなみに、物の怪は寝ていないでしっかり聞いている。暇つぶしもあるが、一番の理由は昌輝が「隣で寝られると集中できない」と言った為だ。

なので、たまに昌輝より物の怪の方が理解したりしていて、不安に駆られる。

春輝の成績は言わずもがな。彰と章も真面目に予習復習をしてい

るのだろっ、学年上位である。

「お前は歴史以外壊滅的だろうが」

「それを言われると弱いなあ」

昌輝の歴史の成績は、何と学年主席である。これが好きこそ物の上手なれ、だろうか。少し違う気もするが。

「ほら、早く食べる。そろそろ春輝の質問も終わるだろう」

「うん」

弁当箱の蓋を開こうとしたところで、春輝が戻って来た。

「何だ、先に食べていても良かったんだぞ。まあいい、食べるか。紅蓮、今日のメニューは？」

答えようとした物の怪の口を塞いで、昌輝が唇を尖らせる。

「春兄、駄目だよ。開けてからの楽しみじゃないと」

「はいはい、わかったわかった」

中学生なのに子供っぽい弟に苦笑して、2人同時に蓋を開けた。

学校（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8960y/>

紅の蓮を救い出せ

2011年12月16日16時46分発行